U-35委員会企画
talk baton 29　活動報告

talk baton とは…

若手プラットフォームづくりの活動の一環として、建築を取り巻く他分野のゲストがトークのバトンを繋げていくコミュニケーショントークイベントです。

建築をフィールドとする私たちと毎回のゲストとの対話を通じて、建築が本来持っている多様性やバイタリティを見つめ直し、これからの建築に求められる領域を探っていきます。

○U-35委員会ホームページ
新着情報や過去の活動報告もご覧になれますので、ぜひ一度お立ち寄りください。
https://www.aaj.or.jp/u35

○U-35委員会インスタグラム
活動内容やメンバーの雑感などざっくばらんに情報をアップしています。
https://www.instagram.com/u35.aaj/

talk baton 29
「建築と宮大工」

ゲスト
有限会社 匠弘堂
宮大工兼設計室リーダー
稲葉耕介 氏

長野県出身
2020年　京都工芸繊維大学 デザイン・建築学課程卒業
2020年　有限会社匠弘堂 入社
2023年〜2025年　首里城正殿復元工事に参加

有限会社 匠弘堂
2001年創業。社寺建築の設計・施工を専門とする京都の宮大工集団。宮大工10名の平均年齢は29歳。
初代棟梁である故・岡本弘の意志と伝統的な木造建築技術を継承し、全国の社寺の新築や修理、復元を手掛ける。
主な仕事に、高山寺金堂・開山堂修理、浄土宗総本山知恩院新法務棟新築、首里城奥書院復原、藤田美術館多宝塔修理、今宮神社大鳥居修理など。



京都社寺建築
の宮大工仕事
匠弘堂

稲葉耕介 氏

今回のtalk batonは「有限会社匠弘堂」のご協力のもと、２部構成で実施した。

前半は匠弘堂の本社にて、社長の横川氏より社寺建築の設計を中心に、原寸図の書き方や彫刻絵様の話、原寸ワークショップから伝統建築の特徴や木材の扱い、継手・仕口、原寸図など多岐に渡って、丁寧なレクチャーをしていただいた。

後半は場所を京都工芸繊維大学に移し、「建築と宮大工」をテーマに匠弘堂の若手宮大工、稲葉氏をゲストにお招きし、宮大工にいたるまでの道のりや稲葉氏が携わった首里城復元工事の現場のリアルな話、最後は質疑応答の形式で伝統技術をどのように現代につなげていくかについて考えた。

前半：社寺建築レクチャー

■「見えないところ」にこそ現れる仕事

レクチャーでは、まず日本建築の特徴について、宮大工の視点から話を伺った。

日本建築では、雨・風・地震などの自然条件に対応するため、屋根や柱が重要になってくる。特に屋根は、雨から建物を守るために大きく出す必要がある。単純な二次元の形ではなく、木材の反りやねじれ、部材同士の関係を考えながら、一つひとつ加工していく。

そこには、図面だけを見ていては分からない「木」と「形」の関係がある。

また、師匠から受け継いだ教えとして、「見えないところまできれいに仕事をする」ことの大切さについても語られた。後世に修理などで建物が解体されたときに、当時の職人がどのような気持ちで仕事をしていたのかが、仕事の痕跡として現れるからである。

■木を知ることから始まる

宮大工の仕事では、木材を単なる材料として扱うのではなく、その性質を読みながら使っていく。

原木を製材し、墨を付け、必要な形に加工する。昔から使われてきた道具を紹介しながら、実際に木を加工する作業についても説明された。現在では機械を使う場面も多いが、木を自分の手で加工する経験が、材料を理解するための重要な学びになるという。

伝統的な道具や加工方法が長い時間を経ても受け継がれていることからも、宮大工の技術が単なる「昔の技術」ではなく、木という素材と向き合うための知恵であることが分かる。

■屋根の形を「原寸」で考える

レクチャーの後半では、設計者にとっても興味深い「原寸図」について説明いただいた。

屋根のように複雑な形状を持つ部分では、二次元の図面だけでは部材の形状を十分に把握することが難しい。屋根自体に勾配があり、さらに木材が反っているため、「平面＋立面＋


会場の様子


レクチャーの様子


原寸ワークショップ

屋根勾配＋反り」を総合して考える必要がある。そこで実際の大きさで図を描き、そこから部材の形や加工方法を読み取っていく。

1．小さな図面で検討する
2．勾配や寸法を確認する
3．形が成立するか検討する
4．原寸大で描く
5．その原寸図を材料に写し取る
6．実際の加工へ進む

実際の加工場では、原寸大の図面を掲示し、そこに設計者や研究者、職人などが集まり、形について議論することもあるという。原寸図は、単に職人が加工するための図ではなく、建築の形をつくるための「共通言語」ともいえる。

さらに今回は、実際に原寸図を描く工程について説明を受け、実際に屋根の反りを原寸で線を引く体験をした。屋根の反りをどのように決め、どの位置を基準として線を引くのか。そこには高度な技術だけでなく、経験に基づく感覚も含まれている。

・屋根の寸法
・勾配
・中心位置
・反りの割合

などから実際に原寸場へ描いていった。

普段CADで設計図を描くこととはまた違う、「つくるための図面」としての原寸図。実際の体験を通して、普段何気なく描いている図面についても、改めて考えさせられる機会となった。

後半：talk baton 29「建築と宮大工」

■宮大工との出会い

後半は、匠弘堂の稲葉氏をゲストに迎えて話を聞いた。

稲葉氏は長野県出身。中学生の修学旅行で初めて京都・奈良を訪れ、特に法隆寺の屋根や佇まいに強い印象を受けたという。


レクチャー後の集合写真

その後、京都の大学へ進学し、建築を学びながら建築サークルで実際にものをつくる経験を通して、図面を描くだけではなく、自分たちの手で実際につくることの面白さを知り、大学卒業後、匠弘堂へ入社、宮大工としての仕事を続けている。

■図面の先にある「現場」

トークでは、稲葉氏が実際に携わった沖縄の首里城正殿復元工事の話を通じて現場の仕事のリアルな内容が聞けた。

大きな材料を加工し、柱や梁を一本ずつ組み上げていく。柱を立て、屋根をつくり、瓦職人へと仕事を引き継ぐ。さらに内部では床や天井などの造作を進める。ちなみに首里城正殿の厚さ１寸の床板の約８割は、稲葉氏が一枚一枚自らの手で張ったという。

一つの建物が完成するまでに、宮大工だけでなく、瓦師や塗師など様々な職種が関わり、それぞれの技術がバトンのようにつながっていく。

設計図の上では一つの線として描かれている柱や梁も、現場では一本の木材として存在する。その大きさや重さ、加工の手間を実感することで、図面からは見えにくい「つくること」のリアリティが浮かび上がった。

■地域風土との関わり

質問者「建築の現場でも機械化・デジタル化が進んでいるが、宮大工の仕事の中で、今後も人の手や経験が必要になるのはどのような部分か。」

稲葉氏「機械加工が増えてきている一方で、最終的な仕上げや、実際の木を見て判断する仕事は、まだ人の経験が大きい。特に、一本一本異なる木の状態を見ながら「この木をどう使うか」を判断することは、経験を積んだ職人の目が必要だと話している。」

質問者「大学で設計を学んだ後、実際の1/1スケールのものづくりの世界に入った稲葉さんから見て、首里城などの現場で感じた「地域性」や、その土地ならではの建築の面白さは何か。」


スケッチを交えて説明する稲葉氏

稲葉氏「沖縄の建築には、京都などとは異なる独特の仕口・構法があり、特に柱と横材を組み合わせる部分に特徴がある。柱に「蟻」のような形状をつくり、横材を組み込む仕口である「蟻上げ・蟻落とし」が、沖縄では台風への対応という意味もあり、非常にしっかりと固定される構法になっている。」

質問者「今の「蟻」の話をもう少し詳しく知りたい。」

稲葉氏「(スケッチを書きながら)

1．柱の中に、横から差し込む材の形に合わせて穴を掘る。
2．横材の先端を「蟻」のような広がった形状に加工する。
3．横材を下から柱の穴へ差し込み、上方向へ持ち上げる。
4．持ち上げることで、蟻形の部分が柱内部で引っ掛かり、組み合わさる。
5．最後にできた隙間へ「楔」を入れる。
6．両側から楔を打ち込むことで、仕口全体を強固に固定する。

という構成です。」

(文責：萩尾)

talk baton 29 を終えて

木材の性質を読み、必要な形を考え、原寸図に落とし、実際に加工し、組み上げる。そこには、設計と施工を分けて考えるだけでは捉えきれない、建築をつくるための一連の思考がある。

レクチャーでは、その技術を宮大工の視点から学び、talk batonでは、質疑応答の中でその技術の背景を掘り下げた。

「なぜこの形なのか」「なぜこの方法なのか」と問い直すことで、現代の設計にもつながる知恵になる。

「建築と宮大工」をテーマとした今回の企画は、建築を「考えること」と「つくること」の距離を改めて見つめ直す機会となった。

対　談　日：2026.06.20
場　　所：匠弘堂
　　京都工芸繊維大学
　　(どちらも京都市左京区)
モデレーター：萩尾涼太（大建設計）